

TRUE関数

使い方マスターガイド



※当ガイドに従うことで、法令違反がないことを保証する資料ではありません。
※あくまで参考としてご活用いただくことを想定している資料です。実際の制度内容は国の資料等をご確認ください。

TRUE関数は「1」、FALSE関数は「0」

TRUE関数は「1」、FALSE関数は「0」

Excelの内部では、TRUE（真）は数値の「1」、FALSE（偽）は数値の「0」として扱われています。この仕組みを理解すると、計算式の中で論理値を自由に扱えるようになります。

基本構文： `=TRUE()`（引数は不要、単に論理値の「TRUE」を返す）

比較	内容	数値としての扱い
TRUE	正しい、有効、ON	1
FALSE	間違い、無効、OFF	0



ポイント `:=TRUE()+TRUE()` と入力すると、結果は **2** になります。

これを利用して「複数条件を満たした数（TRUEの数）」を足し算で集計することも可能です。

【最重要】 VLOOKUP関数の引数としての「TRUE」

【最重要】VLOOKUP関数の引数としての「TRUE」

実務で最も「TRUE」と入力する機会が多いのが、VLOOKUP関数の「検索の型（第4引数）」です。

=VLOOKUP(検索値, 範囲, 列番号, [検索の型])

検索の型	意味	データの条件	使い所
FALSE (0)	完全一致	特になし	商品コード、ID検索など（実務の9割）
TRUE (1)	近似一致	昇順に並んでいる必要あり	点数によるランク付け、重量による送料計算など

 **ポイント** : 「0～59点はC、60～79点はB、80点～はA」といった段階的な判定をする際、TRUE（近似一致）を使うと、たった 3行の表で範囲検索が可能になります。

【省略テクニック】 IF関数でのスマートな書き方

【省略テクニック】IF関数でのスマートな書き方

IF関数などで「A1セルがTRUEだったら...」という条件を書く際、わざわざ =TRUE() を使う必要はありません。

初心者の書き方： =IF(A1=TRUE(), "OK", "NG")

プロの書き方（省略形）： =IF(A1, "OK", "NG")

解説： IF関数の第1引数は「論理式（TRUEかFALSEか）」を求めています。A1セルの中身がすでに TRUE なら、比較式を書かずにそのまま A1 と書くだけで判定が機能します。
これは数式をスッキリ見せるための重要なテクニックです。

【応用】 チェックボックスと連動させる

【応用】チェックボックスと連動させる

リボンの「開発」タブから挿入できるフォームコントロールの「チェックボックス」を活用すれば、ON/OFFの状態をセルのTRUE/FALSEとリンクさせることができます。これは、ユーザーフレンドリーな操作と自動化を可能にするための、実用的なテクニックです。

手順：

1. チェックボックスを右クリック > [コントロールの書式設定]。
2. 「リンクするセル」に任意のセル（例：B2）を指定。
3. チェックを入れるとB2がTRUE、外すとFALSEになる。

活用アイデア：

- 条件付き書式と連携：=B2（TRUE）の時だけ行全体をグレーアウトする（完了タスクの消し込み）。
- 集計と連携：=COUNTIF(B:B, TRUE)で「チェックされた数」をカウントする。

【免責】

※当資料に従うことで、法令違反がないことを保証する資料ではありません。

※あくまで参考としてご活用いただくことを想定している資料です。また当資料は、公開日時点の内容となっております。最新の情報、実際の制度内容は国の資料等をご確認ください。